

図書館報

血光

No. 155



凜として生きる

酒田南高等学校

校長 中原浩子

庄内に移住して九年目の夏を酒田南高等学校の校長として奔走しているなんて、一体誰が想像したことだろう。大学進学を機に生まれ故郷の広島を離れてはや四十年。海外人材になることを夢みて上智大学で外国語を学んだ四年間。地方出身の四大卒女子は決定的に不利だった就職活動で社会の不条理を体験した。男女雇用機会均等法施行前の会社組織では、「女子はお茶くみとコピー取りに専念する」ことが役割だった。そんな環境下で会社初の海外営業女性担当の地位を獲得するために他人の三倍働いた。

そんな私が大病を患い、故郷に戻ってからの数年は、まったく自信をなくし茫然自失した年月だった。親や周囲の大人の意見に自分の心の声押し込め、本意ではない選択をした人生は、砂を噛むような日々で、今思えばまるで亡霊のような自分ではなかった。そんな私に息を吹き返させてくれたのは、当時九歳の長女だった。二人で新しい生活を始めたある日、長女がくれた言葉にハッとした。「家を出る前のお母さんは弱虫だったけれど、今のお母さんは強くてかっこいい」。他人のためにと自分を殺して生きることが利他愛だと考えるのは大間違いだったこと。自分らしく力強く生きる姿が他者の希望になることこそが真の利他愛なのだを教えてもらった瞬間だった。自分の心の声を聞き、それに従って勇氣を持って生きることを始めたのは、その頃からだ。私の苦い経験から「幸せとは自分の人生が自分の手中にあると感じられること」という哲学は生まれた。

酒田南高等学校の校長に
なって一年四ヶ月。毎日学校で会う若く新しい命は、他者にどう思われるか、人の目が気になり、オロオロ震える心の集合体だ。もっと広い世界を俯瞰すれば、今の自分の位置なんてちっぽけで、そんなことにオロオロしている暇なんてないはずなのだけれど、思春期とはどうしてこうも効率悪い時期なのだろうと自分や子供の経験を通してもつづく思ってしまう。

GWに「早く学校に行って勉強したい、どうしてGWなんてあるんだろう」と生徒が語って驚いたと聞いた時、私は確かな手応えを感じた。観光・地域創生専攻は、「学びは現場にある」をモットーに、ドンドン地域に出て行き実際に人に会い話を聞き自分の体を動かして学ぶ実践教育を実現している。子どもは可能性のかたまりだ。それを阻害し圧迫しているのは大人ではないだろうか。彼らの可能性を最大限に引き出し、開花させる手伝いをする、それこそが教師の役割だと信じている。社会で生きるには、場の空気や人の思いを推測することは必要だ。しかし、村度が習慣になると自分の心の声が聞こえなくなってしまうのではないだろうか。「自分の心の声に従って、凛として生きる勇氣を持つこと。」この大切な哲学は庄内の自然やこれまで出会った人々が教えてくれた。これまでも、これからこの哲学を大切に生きていきたい。

山居島の米倉庫と櫓

元酒田市収入役 佐藤 昭雄

酒田で最も絵になる風景は櫓の大樹に包まれた白壁が一際目立つ山居倉庫群でしようとは、大火の折、講演に来てくれた東大の高山英華先生である。

江戸時代以降の酒田の経済を支えてきたのは、もちろん「庄内米」である。最上川の水運利用で酒田港に集積される庄内米は、米倉庫と「米商会所」を通過して、千石船などで江戸、北陸、関西、北海道に出荷された。

山居倉庫は、明治二十六年、会所が酒田米穀取引所となった機会に、旧庄内藩主酒井氏が付属倉庫として建設したもので、最上川と新井田川に挟まれた中州の「山居島」を選び、敷地面積は約一七三〇六㎡。過去の洪水時や満潮時の水位を見極め、三・六メートルの高さで埋め立て、丸太を打ち込んで建物の台を置き、一棟約五百㎡の米倉庫を連続して十五棟と事

務所も含め、延約八千㎡の建物群は見事である。

建物は木造の土蔵造り、設計者は鶴岡市の棟梁、高橋兼吉、建設費は当時の価格で二〇万九三八七円(現在の価値に換算すると数十億円)。当時の技術の粋を集め、二重の

屋根と湿気防止の内部構造(特に換気装置)は、自然を利用した低温倉庫として、あまりにも有名である。加えて、強風と西日を防ぐために植え込まれた四十二本の櫓は、今や見事な大樹となって景観上なくてはならぬ背景をなしている。

実は山居倉庫建設以前に本間家で「新井田蔵」二十五棟の巨大な倉庫を所有していたのだが、明治二十七年に酒田地方を襲った庄内の大地震により壊滅し、新築間もない山居倉庫が独占する形となった。

山居米は厳格な品質検査と管理によって、声価は高ま



山居倉庫全景

るばかりとなり、ここで発行する米券は貨幣の代用として民間にも流通し、国債同様の信用を博した。ちなみに米の品質検査の等級を誤った検査員は、切腹を覚悟させられたとの記録がある。

昭和十四年、食糧政策が国家管理制度に移行して米穀取引所は廃止となり、山居倉庫は農業倉庫以外に転換された。現在はJ A全農山形が所有し、新しい設備を導入して、およそ六千トンの庄内米が保管されている。

昭和六十年、約一億円の改良費を投じて一号倉庫を改良した。それは資料館である。ここで働いていた人達の勞

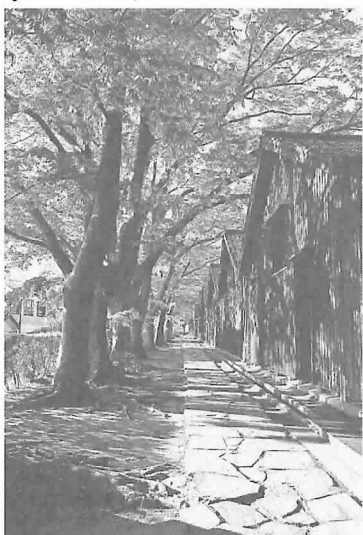
働風景を人形や写真で展示、日本一の米を作った明治以降の品種改良や農家の暮らしが、展示品とビデオで見られ、オープン以来、二百万人の観光客が訪れている。

かつては、秋の出荷時ともなれば倉庫前の広場は荷車や大八車であふれ、力自慢の女丁持達が一人で四俵を背負って活躍したのも昔の物語、NHK連続テレビ小説「おしん」では山居倉庫が有名になった。

酒田市が平成十六年、二棟の倉庫を買収し、東の方は「幸の館」、反対に西側は「華の館」として百年の歴史と違和感のない観光施設「酒田夢の倶楽部」となった。

「華の館」には酒田の歴史や文化を紹介する物品が展示されている。

古い建物の構造が持つ素朴な木格子の光も影も、これらの作品の引き立て役となっているが、空間が広いだけに全体照明が暗く感ずる。



山居倉庫(櫓並木)

外から入ってきてしばらくは目が慣れず困ったのは私だけだろうか。

物販施設の「幸の館」で、一番感じたのは立派なトイレである。今や粗末なトイレには観光客が寄り付かない時代だが、ここは公共施設の模範ではなからうか。

「おしん」から教えられた観光もここを拠点として完成した海鮮市場や既存の観光施設と一体となり、点から線となってネットワークを形成しながら、「粋な文化に今日も出会う街」にしたいものである。

(筆者の佐藤昭雄氏は、昨年八月十九日に逝去されましたが、その直前に当館報向けに原稿をまとめて執筆されていることから、継続して掲載するものです。)

戦前の酒田における映画館(1)

酒田市立図書館長 岩 浪 勝 彦

平成七年に酒田市の発行した「酒田市政改訂版 下巻」の「文化・スポーツの展開」の章では酒田における映画史に約二ページを割いているほか、昭和五十三年発行の「目でみる酒田市史」にも市内の主な映画館の写真が数枚掲載されている。

活動写真という新しい形式の大衆娯楽が酒田の地で初めて紹介された明治末期から、テレビが一般家庭に普及する昭和三十年代半ばまでの約五十年間にわたって、映画が娯楽の王様であったことは否定できない事実であるにもかかわらず、我が国では長らく芸術とは認められてこなかったこともあってか、客観的資料に基づいた酒田の映画事情をまとめた研究がなされたことはなく、残念なことに酒田の映画館に関する資料はもはやほとんど残っていない。

ただだけ入手するように努めてきたが、過去に出版された地域史資料では執筆者個人の記憶に頼ったものがほとんどであり、市内にあった映画館の名称、位置、営業時期といった基本的な情報さえもえ判然としない状況が長く続いてきた。

ところが、光丘文庫が所蔵する明治から昭和にかけて地元で発行された新聞が電子化されたことにより、パソコン画面で手軽に閲覧できるようになったため、残された紙面から戦前の酒田における映画を取り巻く状況がかなり明らかになってきた。その結果を数回に分けて紹介したい。

○巡回興行の時代

映画といえば映画館で観るものというのは、酒田では大正四年(一九一五)五月以降のことであり、それ以前は興行師が東京から映写機を運び、山王祭の際に柳小路や

港座で上映する、もの珍しい見世物の一種であった。

現時点で最も古い酒田における映画の上映記録は、明治四十二年(一九〇九)五月十八日付けの佐藤とし江(當時は西荒瀬村立酒井新田尋常小学校教諭)が残した日記中の前勤務地である吹浦尋常高等小学校の元教え子らとともに活動写真を観に行き、「なかなかおもしろかりき、もう大入れにて窮屈を感じぬ」という記述である。残念なことには上映場所までの記述はないものの、当時の映画は夜間に上映するものであった。また、同年六月八日には特待券をもらってMパター映画を観たとの記述が出てくる。彼女はこの年だけで活動写真を五回観に行っている。この「Mパター」とはフランスの映画会社パテ社から社名をとり、自社でも映画を製作し、全国を巡回上映

していた映画会社で、のちに日活となる会社である。

明治四十三年(一九一〇)七月二日付けの「酒田新聞」には、港座におけるMパター商会の活動写真についての記事が掲載されている。

○最初の常設館「大正館」

酒田で最初の常設映画館は大正四年(一九一五)五月九日に上内匠町七十六番地に渡部仁七によって営業を開始した大正館である。

ここは、当初、大正元年(一九一二)に開業した「大正亭」という演芸館であり、場所は現在の居酒屋兵六玉のあたりであった。

大正四年十月五日の「酒田新聞」演芸欄には「大正亭の活動写真は映写の鮮明と弁士の説明がよいので毎夜大入の盛況なり」とある。

開業時の新聞広告では、開業にあたって天然色活動写真会社と特約を結んでいるとあるほか、大正五年には夏季は館内に扇風機を設置しているため暑さ知らずとあり、少年音楽隊を編成して楽器演奏による宣伝を行っていた。

エムパター株式會社活動大寫眞
本部特派巡遊隊
歌舞伎狂言 歌 種
新派演劇 歌 種
外敷種 毎夜差替
毎日午後六時開會
三月一日ヨリ
港 座 建 元

明治45年3月1日
「Mパター」広告

謹賀新年
常設

大正館



主 渡部 仁七
仁吉
仁三郎
仁太郎

大正館の広告(大正10年)

大正館は民家を改造した建物を使用しており、大正四年十一月の大正天皇即位を祝う御大典祝賀仮装行列の写真にその建物の一部が写っているが、現在の我々が想像するところの映画館の建物には見えない和風の建物である。

大正館は、後述する上内匠町の三つの常設館による営業競争の結果、大正十年九月で営業を停止するまでの六年四か月間、映画館として営業を続けた。

なお、昭和五十三年に発行された写真集「目でみる酒田市史」に掲載されている大正館の建物写真は、建物正面上部にある看板のイタリヤ映画(国よ若き国)から撮影された時期は大正六年頃と推測できる。(次号に続く)

俳句でなにを詠むのか

青猫句会代表 大江 進

俳句の基本形は五七五の十七音である。これほど短い言葉でいったい何を詠むか、詠めるのかというのははなはだ難問である。言い足りないことや意図を正確に伝えようと

して言葉をさらに継ぎ足すことは俳句では駄目とされているので、実際の句作では非常に悩むことになる。

テクニカルな話を先にするならば、まず何度も推敲する。同じ意味合いでもっと的確な言葉がないか歳時記や国語辞典、類語辞典などを紐解く。平仮名を漢字にする、逆に漢字を平仮名にする。上中下の順番を入替える。切れ字や擬音語・擬態語を導入する。それでもしっくりしない場合はしばらく寝かせておく。

作ってすぐはどうしても言外の情景や情感などを作者ゆえに脳裏に浮かべてしまっただけ、一旦作者の手を離れてしまえば、読み手にとっては眼前の十七音がすべてだ。それを唯一の手がか

りとして詩的想像を働かせられない。

寝かせるということは自分の句を見ず知らずの他者の句であるかのように批評するということである。私の句帳はパソコンの中にあるが、ときおり過去の句を見直して手を入れることがあり、初発から二、三年もしてからやっと日の目をみる句がしばしばある。

しかしそんなことよりもはるかに悩むのは「何を詠むか」ということだ。

大昔から変わらぬ自然の風物がある。俳句が花鳥風月の詩であるといわれることがあるのはいわば当然のこととであって、人為的な影響はなにかがあるにせよ自然の摂理は大昔から変わらな

いである。その自然環境の中で生きていくしかない人間が、自然の移り変わりや機微を詠んでいく。自然の美しさや自然への畏敬の念を

言葉にする。

いわゆる「伝統俳句」と称される俳句が今も俳句の主流の一つで、おそらくもっとも多く俳人を擁することであろう。

しかし昔の俳人と違って、我々は生態系やDNAや進化論や地球の構造や宇宙の成り立ちといったことを幾分か知ることになった。したがって花鳥風月を前にしても、どこか昔の俳人とは違う五感と意識を持って接することになるだろう。むしろ数百年前の俳人と寸分違わぬ句を詠むことは実はすでに不可能なはず。

むろんそれが句の上に明示的に現れているか、微妙なニュアンスとして滲み出しているのか、あるいは読者にはほとんど感得できないくらいに背後に隠れているのかの差異はあるにせよ、である。

これは私の句であるが(以下掲載句はすべて自句)、【少しくスペアもあるよしペーパームーン】は時に球体ではなく薄っぺらい一枚の紙のように感じられる月であるが、我々はすでにあれが地球から三十八万キロ離れた地

球の惑星であり、しかも人類が一九六九年にその地表に降り立ったことを知っている。以来、月自体は全く同じであるのにそれ以前の月に比べいささか荘厳感や神秘性を減じたことは否めないと思う。



【宇宙の人二三来たりて青き踏む】の下の「青き踏む」は春の季語で、萌えだした草原にくり出して野遊びをする様子である。が、もちろんこの場合の宇宙人とは人間のことである。なぜなら実質的な意味合いにおいて

は人間が唯一の宇宙人であるらしいことが科学の進歩によって明らかになったからだ。

芭蕉や蕪村の時代と違って人間の内的宇宙、すなわち人体の仕組みも徐々にわ

かってきた。そこで【シナプスの茂みより聞こえ遠蛙】という句。「遠蛙(とおかわず)」は春の季語であるが、どこか遠くから聞こえてくる蛙の鳴き声のこと。しかしその声は自分の脳内の神経索から聞こえてきているだけの幻聴かもしれない。あるいは蛙の声と脳が勝手に共鳴しているのか。

私はいま二〇一九年の日本の東北地方の庄内に住んでいる。いまここで詠めることを詠まないと、私が俳句を作り外に発している意味がほとんどない気がする。全国どこであっても、どの時代であっても通用するような俳句ばかりでは仕方がないと思っ

【チェレンコフの光たずさえ春時雨】の光とは荷電粒子が物質中の光速より速い場合に出る光のことである。

【神さまはさぼっているのか三・一一】は二〇一一年の東北大地震のことだが、山形県の隣県で起きた、半分人災といわれない大災害に触れないわけにはいかない。無神論者だからこそ。

ハイカラさんの日常生活

明治三十八年暑中休暇の日記より

酒田市立光丘文庫古典籍調査員 柏 倉 由紀子

新しい元号が発表された日、朝ドラ再放送で『おしん』が始まりました。小作の家のあまりの貧しさに、口減らしのため奉公に出されるおしん。最上川を筏で下るシーン、何度見てもこみ上げてくるものがあります。

一方で同じ時代、袴をはいて颯爽と学校に通う少女達がいきました。『はいからさんが通る』でおなじみの女学生です。

明治後期の頃、尋常小学校を卒業して進学する場合男子は旧制中学校、女子は高等女学校へ進むのが一般的でした。とはいえ進学できるのは、経済的に余裕のある家庭の子女がほとんどで、特に女子の場合は進学率わずか四・二%でした。

『明治三十八年暑中休暇の日記』は、県立酒田高等女学校に通う本科四年生の佐藤とし江さんが、夏休みの宿題



酒田高等女学校

とし江さんの家は荒瀬町（現在の^{※1}新井田町）にありま

した。父親は数年前に亡くなり、祖母、母親、姉、姪と暮らしていたようです。酒田町内や鶴渡川原村（現在の^{※2}亀ヶ崎）などの家々へ「米を持っていき」「銭の懸取にまはり」という記述が数回見られることから、米の商いもしくは

地主の家であったかと思われ

ます。さて、八月三日の日記をみてみます。

「朝五時に臥戸を出で身体を拭ひ居間を掃除し食事をなし、それより暫時休息し書文を見て新片町に使にゆきそれより昼飯を食し又も少休みて後町^{※1}の青塚に桑摘みに姪と二人にて行き、それより家に來たりて皆々一同にて四方八方に話をなして、姉より一冊の本をもらい、それより少し見て夕飯を食し暫時休息して姉より実いたのもしき話をききて寝に伏せり今日はこれできよなら」この日は特別な出来事もなく、普段の暮しの様子が書かれています。

蚕を飼っていたとみられ、しょっちゅう桑摘みに出かけています。ある日は「生糸を一鍋とりましたが私は取る事が下手なもので御坐ひますから時間がかりました」とあります。

又、「姉と西山の畑に参り種々の果実を食し大根を植え、豆の草を少しとりて」や「薪木を新田川の岸よりひっぱりたり」という日もあ

り、力仕事など一切しないお嬢様かと思いきや、けっこう体を張って家事をこなしています。

休み中に二回程学校へ行き、「ワフル」焼鍋をかりて「ワフル」を焼き、家族や親戚にふるまって大いに褒められた、というエピソードがあります。ワッフルは明治中頃日本に入ってきたのですが、『この鍋はまだ滅多に売っていない、食品屋へ頼むと横濱から取り寄せてくれるが铸件だから値は少し高い』^{※2}もので、酒田の土地柄かもしれないが、地方の女学校ながら新しいものを取り入れていることに驚きます。

また、オルガンやヴァイオリン、手吹琴（^{テラコ}手風琴）・アコーディオンをひく様子が何回もあり、「ハイカラ」な一面を覗かせます。

そのほか勉強、読書、友達との交流や季節の行事、好物の餅や団子のことがありのままに書かれていて、女学生の実態がよくわかります。日記の最後には担任の先生から「少しも偽なく飾りな



有燁会誌第三号より

く露骨に無邪気に書かれてあったね、頗る面白く拝見しました。殊によく家事に手伝ったのは流石」と講評が記してあります。

高等女学校の教育方針は良妻賢母の育成であったため、学習科目も家事、裁縫、作法などに重点が置かれていました。卒業後の進路は結婚や家事手伝いが多く、就職先といえば小学校教員がほとんどでした。

とし江さんはその後、酒田尋常高等小学校などの教員を経て酒田高等女学校の教員となります。ハイカラさんと呼ばれた女学生の日常生活を通して、この時代の様相も透けて見えてくるように思いました。

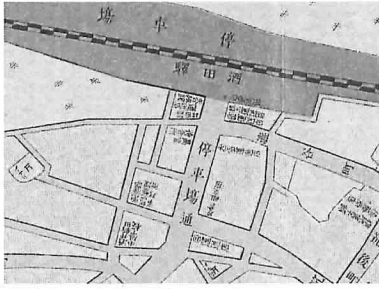
※1 おそらく筑後町（現在の相生町一丁目）のこと
※2 村井弦斎著『註釈 食道楽 春の巻』報知社出版部1904から引用



「光丘文庫デジタルアーカイブ」のコンテンツ追加について

光丘文庫所蔵資料について、市民のほか、広く全国に周知を図ることに、酒田の歴史について学び、親しんでもらうため、同文庫を所管する図書館では、平成三十年から「光丘文庫デジタルアーカイブ事業」を実施し、インターネットで公開しています。

今年度は、所蔵資料のデジタル画像の追加や百年前の地図と古写真画像のリンク、戦後の市内各所の空中撮影画像と最新地図の対比について、十月からの公開を予定しています。



「酒田市街全図」の一部

(今年度の主な内容)
□百年前の地図と旧町画像等とのリンク
大正七年の「酒田市街全図」と最新地図の重ね合わせ、古写真・広告画像をリンクさせ、街並みの変化を対比します。

□戦後の空中写真と最新地図との重ね合わせ
終戦直後、米軍が撮影した空中写真等と現在の地図を重ね、街並みや港湾、道路の移り変わりを対比します。

図書館企画展示のお知らせ

当館では、新刊図書や郷土出版物の案内、常設企画展示のほか、定期的にテーマを変えた企画展示を実施しています。

今回の企画展示は、神社・仏閣等パワースポットめぐり、寝台列車や豪華客船などについて特集しています。

是非、手にとってお気に入りの本をご覧ください。

- 神社・仏閣めぐり
- 走る客室・動くホテル
- 国際アンデルセン賞に輝いた日本の五人

【展示期間(予定)】
七月三十日～九月二十四日

○読書感想文を書こう
【第六十五回青少年読書感

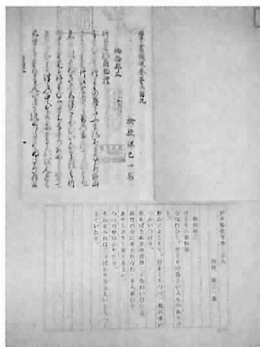
デザイン 佐藤 十弥

想文全国コンクール」の課題図書、「第五十二回YBC読書感想文」指定図書、「第五十二回夏休みの本(緑陰図書)」を展示しています。

○夏休みの自由研究「工作コーナー」
子ども向けの自由研究や工作に関する本を展示しています。植物や昆虫に関する本、身近な材料で作れる工作の本などを用意しています。

光丘文庫展示

「群書類従」に掲載された古典籍展」
塙保己一(ハナワホキイチ)が編集した「群書類従」に収められた古代から江戸初期までの日本で著された書籍を展示しています。連綿体(続き文字)で書かれた日本調溢れる古典の世界をお楽しみください。



群書類従・竹取物語

【展示期間】

四月八日～九月二十七日
(土日・祝日を除く)

図書館では年間を通じて雑誌スポンサーを募集しています
「雑誌スポンサー」とは図書館の閲覧コーナーにおいてある雑誌の費用を負担していただき、その雑誌の最新号カバーにスポンサーの広告を掲載するものです。カバー裏面に広告を表示します。

募集時期/随時
対象/企業、事業主、商店、団体(病院、協会、組合等)(個人は対象外、審査あり)
広告を掲示する雑誌/図書館が現在購入している雑誌。それ以外の雑誌を希望する場合は応談
お問合せ/中央図書館
電話/二四二九九六
FAX/二四二二九八〇
メール/info-lib@city.sakata.lg.jp

日本海総合病院と連携しています

同病院が厚生労働大臣指定の地域がん診療連携拠点病院であり、医療関連書の利用者には実際に病気の悩みを抱えている方が多いと予想



がん相談支援センターパンフレット

されることから、同病院のがん相談支援センターへの相談につながるため、国立がん研究センター発行の各種がんに関するパンフレットやがん相談支援センターのパンフレットを館内の医療関連書側に設置しました。
また、従来から同病院内で開催してきた「ワンストップ相談会」を、九月二十八日に総合文化センターで開催いたします。
院外では初めての開催であり、図書館でも関連資料の企画展示を予定しています。

【執筆者紹介】

- 中原 浩子(酒田南高等学校 校長)
- 佐藤 昭雄(元酒田市収入役)
- 岩浪 勝彦(酒田市立図書館 館長)
- 大江 進(青猫句会代表)
- 柏倉由紀子(市立光丘文庫 古典籍調査員)

発行 酒田市立中央図書館 酒田市立光丘文庫

酒田市中央西町二番五九号 酒田市中町一丁目四番一〇号

電話(24)二九九六番 電話(22)〇五五一番

印刷 明徴出版(株)